



Title	米国でのMPH (Master of Public Health)留学について
Author(s)	稲垣, 陽子
Citation	目で見るとWHO. 2022, 81, p. 20-21
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89675
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

米国でのMPH (Master of Public Health) 留学について



Johns Hopkins Bloomberg School of Public Health,
Master of Public Health Program

稲垣 陽子

鉄蕉会亀田総合病院、亀田ファミリークリニック館山、米軍横田基地を経て現在米国にて公衆衛生学を専攻。低所得国の非感染性疾患対策に関心を持つ。

はじめに

私は現在ジョンズホプキンス・ブルームバーグ公衆衛生大学院で、低所得国のプライマリヘルスケアについて研究しています。金沢大学医学類を卒業し、その後計4年間臨床医として勤務した後に、米国に移動しました。医学生の頃に国際保健という分野を知り、Master of Public Health (MPH) 留学を視野に入れました。しかしながら前例が多くはなく、情報探しに苦労しました。本稿では、今後留学を目指す方々の参考となるように、こちらでの生活や授業の様子についてご紹介したいと思います。

留学の動機について

私は医学生の頃にボランティア団体に所属し、東南アジアを中心に NGO の活動に参加させて頂いていました。当時は孤児院や病院といった場所で、患者さんへの清拭、医療スタッフの補助、炊事洗濯などを体験させて頂きました。医学部1-4, 6年生の休暇を東南アジアで過ごし、人の魅力に触れ、国際保健を志しました。一方で NGO の活動に携わる中で、政策によって受ける影響をも実感していたため、次第に保健省や国際機関といった意思決定機関にも関心を寄せました。先輩の紹介を通じて国連パレスチナ難民救済事業機関でインターンをさせて頂いた際に、プライマリヘルスケアや、慢性疾患対策の分野に興味を抱き、将来大学院で学びたい具体的な分野として考える様になりました。

ジョンズホプキンス公衆衛生大学院について

本校は米国メリーランド州ボルチモア市に位置しています。ボルチモア市は本州では最大の都市であり、チェサピーク海岸に面する港町として知られています。公共交通手段として船が現存していたり、ムール貝や蟹を使ったレストランが有名であったり、また歴史的な建物が多く残っていたりと、美しい都市である一方で、銃や麻薬に関する事件も多く、治安の面では慎重である必要があります。人種差別、低所得、ホームレスといった様々な課題に対する市民団体の取り組みも大変盛んであり、従って公衆衛生学を学ぶ私にとっては、大変魅力的な都市であります。

ジョンズホプキンス公衆衛生大学院は、1916年に創設された世界最古の公衆衛

生大学院であり (1)、現在 1700 以上の教職員と、80 を超える研究センターを備えています (2)。本校の特色の一つに、国際保健を学ぶ上での豊かな土壌が挙げられます。10 ある学部の一つが、国際保健学部 (Department of International Health) であり、ここでは低所得国に関する様々な研究プロジェクトが行われ、そのネットワークは 90 カ国近くに及ぶと言われています。母子保健、ワクチン、HIV/AIDS や結核などの感染症から、高血圧や糖尿病などの非感染性疾患まで幅広い分野で取り組んでおり、教員や学生もアフリカや東南アジア出身者が多く、国際保健に関する新しい話題が次々に舞い込んでくる場所だと感じます。加えて、こういった研究プロジェクトに学生が参加できる機会も多く、経験を通して知識や技術を得やすい場所でもあると実感します。



週末の風景



①キャンパスライフの風景 ②学生組織 J.B Grant Global Health Societyの風景 出典: <https://www.facebook.com/jbgrantglobalhealthsociety/>

大学院生活の様子

MPH プログラムは、2年以上の職務経験を持つ社会人を対象とした短期集中プログラムです(3)。1学期(term)が8週間であり、summer term, 1st ~ 4th termの合計11ヶ月になります。2020年度は新型コロナウイルスの影響で完全オンラインに移行しましたが、2021年度の夏からオンラインと対面式のハイブリッド授業が導入され、秋からは完全対面式の授業も再開されました。

カリキュラムは、おおよそ必修科目が半分、選択科目が半分となっており、必修科目では、医療政策学、環境保健学、人口動態学、疫学、生物統計学、質的研究の手法、行動社会科学などを学びました。必修科目の多い夏の間は、人種差別、銃暴力、薬物乱用といった米国特有の公衆衛生課題を扱うこともありましたが、私の場合は選択科目の多くが低中所得国関係の内容であったため、秋以降は低中所得国を主な対象として学びました。2000以上の選択科目があり(4)、どれも魅力的で選ぶのにも苦労しましたが、私の場合は生物統計学(Propensity score, regression discontinuity,

instrumental variables といった特に因果推論の手法)、国際保健分野のモニタリング・評価に関する手法、サーベイランスの手法といった分野を中心に選びました。大体の講義は、全員一斉の授業に加えて、Laboratoryと言われる小グループの授業が用意されているため、学生同士で理解を深めながら、直接講師に質問することも可能です。

夏の間は1つしか対面授業がなく、その他は全てオンラインでしたが、秋以降は半分近くが対面授業となり、週の2-3日をキャンパスで過ごすような形になりました。毎日1~3つの授業がありますが、多くの学生が合間も課題読書や宿題の提出などに取り組み、忙しくしています。また、秋からは卒業論文(Capstone paper)のための準備と、Practicumと言われる実習活動が始まるため、本格的に研究や実地活動などにも取り組む形になります。いずれも指導教官と相談して、具体的な内容を決めていくことになります。私の場合は、低中所得国のコミュニティヘルスワーカーによる非感染性疾患のケアに関心があったため、前者(capstone project)では、コミュニティヘルスワーカーによる高血圧ケアにつ

いての文献の系統レビューを行い、後者(practicum)ではネパールのNGOと協力し、コミュニティヘルスワーカーによる高血圧スクリーニングに関する横断研究を行っています。いずれも多岐にわたる分野に精通した教授陣、そして彼らが築いたネットワークといった要素がなければ実現しない研究であり、現在の恵まれた環境に大変感謝しています。

最後に

私は医学生時代に国際保健分野を志し、それ以来 MPH 留学は私にとって長年の目標の一つでした。公衆衛生や国際保健について当たり前の様に学ぶことが出来る環境に、今も時折夢の中を歩いている様な感覚を覚えます。私の留学は、多くの先輩方の助言の上で実現しました。特に、経済的な側面でご支援頂いた伊藤国際教育交流財団の皆様には、改めてお礼を差し上げたく存じます。

MPH 留学の上では語学力、経歴、タイミング、経済力など様々な要素が重要になりますが、皆様のお役に立てればと思いますので、是非お気軽にご連絡を頂けると幸いです。

1. History | Johns Hopkins Bloomberg School of Public Health [Internet]. [cited 2022 Apr 9]. Available from: <https://publichealth.jhu.edu/about/history>

2. At a Glance | Johns Hopkins Bloomberg School of Public Health [Internet]. [cited 2022 Apr 9]. Available from: <https://publichealth.jhu.edu/about/at-a-glance>

3. Master of Public Health (MPH) | Johns Hopkins Bloomberg School of Public Health [Internet]. [cited 2022 Apr 9]. Available from: <https://publichealth.jhu.edu/academics/mph>

4. Course Directory - Johns Hopkins Bloomberg School of Public Health [Internet]. [cited 2022 Apr 9]. Available from: <https://www.jhsph.edu/courses>